

大東アレル帳

(12)

狭き門

「行場がある。産む、生にアウトあり、スパークあまれる、苦しみを体得させり、タッチあり、人生のゲられる岩場である。トくぐりには上がりはな現世に生を受け、十数年く、やがて人生八十年時代の勉学ゲート、巣立ち後、を迎えようとしている。社会人のゲート、その折々
文・今村安和

熟年者の朝の目覚めは早い。

カラフルなウエアの人々が、コート整備にいそしみ汗を流す。「よし今日も頑張るぞー」とゲートボール競技を楽しむ。

「カーン」と、晴れた空に響くボールの音、白いボールが転がり、ゲートを通り過ぎる。歓声と拍手がわきあがる。

コートの広さは、横二五メートル、縦二〇メートル、三カ所にゲートを設け、ゲートをめがけて、ボールを打つ。そのボールを追ってゆく、コート中央のゴールボールにボールを当て「上がり」となる。

あまり激しい動作はないが、チームワークと頭の回転を必要とする優雅なスポーツである。

ボールが門（ゲート）を通過する競技なので、創案した北海道の鈴木氏が、ゲートボールと名付けたという。昭和二十三年のはじめ、子供たちのスポーツ用品の乏しきを見て、フランスのクロックケ競技にヒントを得、木製の球と打棒（スティック）を考案し子供たちに与えた。メイドインジャパンのスポーツである。

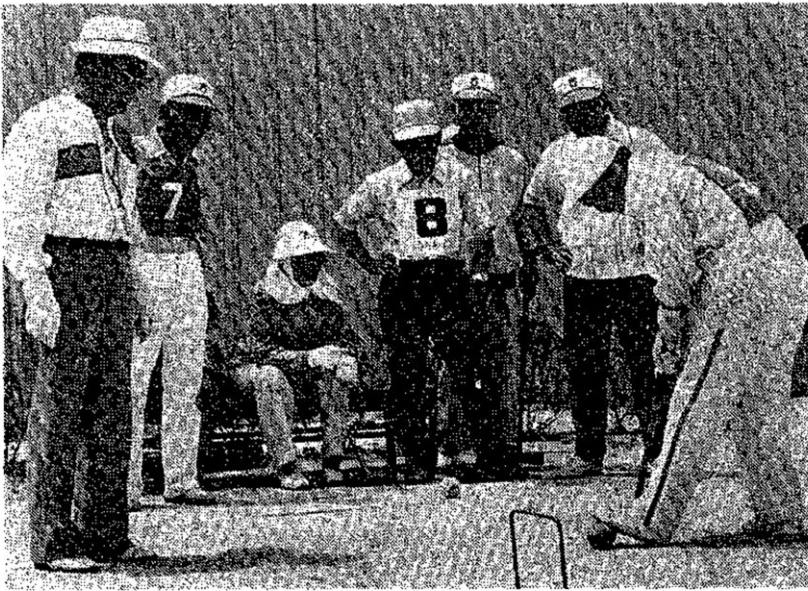
その後、一部の愛好者で楽しまれていたものが、中高年者を中心に静かなブームをまき起こしたようである。

ことに、日本レクリエーション協会総裁、高円宮の父君、三笠宮崇仁さまがゲートボールに熱中され、より一層、全国的に広まった

ようである。このゲームが、関西地方に広まり始めたころは、なんとなく「オジンくさい」と軽視する向きもあったが、親、子、孫の三世代がゲームに参加、有名タレントと共にゲームを楽しむテレビ番組も毎週放映される時代となった。

本市でも、五十七年三月市老連ゲートボール連盟が結成され、二十六チーム、二百八十名を超える選手が登録されているとのこと。人それぞれの生き方はあっても、人生とは、ゲートくぐりに始まり、また終わる。

南北朝の戦いで有名な笠置山の正月堂近くに、巨岩奇石の組みあわさった奥行き一〇以上の「胎内くぐり」行場がある。産む、生にアウトあり、スパークあまれる、苦しみを体得させり、タッチあり、人生のゲられる岩場である。トくぐりには上がりはな現世に生を受け、十数年く、やがて人生八十年時代の勉学ゲート、巣立ち後、を迎えようとしている。社会人のゲート、その折々
文・今村安和



ゲートボールはゲートに向かって進む競技です。人生もゲートくぐりに始まり、また終る……